

NAOJ
National Astronomical Observatory of Japan

NINS
National Institutes of Natural Sciences

Inter-University Research Institute Corporation SINCE 2004

IMS
Institute for Molecular Science
NIFS
National Institute for Fusion Science
NIPS
National Institute for Physiological Sciences

National Institute for Basic Biology

日本語

国立天文台
【コクリツテンモンダイ】

大学共同利用機関法人 SINCE 2004

自然科学

【シゼンカガク-ケンキュウキコウ】

研究機構

核融合科学研究所
【カクユウゴウカガク-ケンキュウシヨ】

分子科学研究所
【ブンシカガク-ケンキュウジヨ】

生理学研究所
【セイリガク-ケンキュウシヨ】

基礎生物学研究所
【キンセイブツガク-ケンキュウシヨ】



機構長挨拶

大学共同利用機関法人 自然科学研究機構

自然科学研究機構は、国立天文台、核融合科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所、分子科学研究所の5つの研究機関で構成されており、宇宙、エネルギー、物質、生命等に関わる自然科学分野の中核的研究機関として、保有する最先端設備の共同利用や先導的共同研究の場を大学共同利用機関として全国の大学・研究機関の研究者に提供するとともに、研究者コミュニティの総意の下、各研究所の役割と機能の充実を図り、それぞれの専門分野における最先端研究を推進してまいりました。

大学共同利用機関は平成16年の法人化により4つの機関に再編され、自主的・自律的に教育研究を行う機関としての位置付けが強化されましたが、本来は異なる研究者コミュニティを背景に持つ各研究所の有機的な連携と、機関総体としての社会的使命を果たしていくことの双方の舵取りが極めて重要です。加えて、大学共同利用機関は独創的な研究を展開する基盤を提供するものであり、我が国の研究者が水準の高い研究を創出し続けることを支える役割を担っており、大学を中心とした研究者コミュニティとともに繁栄することがその使命です。

自然科学研究機構は、天文学から脳科学までの幅広い学術領域の研究を推進し、構成機関である5つの研究所はそれぞれが異なる学術分野を基盤とする研究者コミュニティを有しています。学術の広がり

や学際的な新たな分野の創出を見据えれば、機構内での閉じた発展は限定的であり、大学共同利用機関法人全体や共同利用・共同研究拠点を含めた大学との連携が不可欠です。このため、4つの大学共同利用機関法人と総合研究大学院大学の連携により設立された大学共同利用研究教育アライアンスや、研究力強化に取り組む国公立大学及び大学共同利用機関法人で構成する研究大学コンソーシアムなど、その取組みはすでに始まっています。また、令和4年度から令和9年度までの第4期中期目標期間の6年間は、大学共同利用機関の将来のあり方が更に問われる重要な期間であると捉えています。

技術革新や社会革新を通じて誇りある未来に向かうには、高等教育人材の活用促進が欠かせません。研究者コミュニティを先導する機関として、自然科学研究機構は科学を通じて、高等教育の重要性や社会への高等教育人材の浸透を促す活動に寄与していきます。

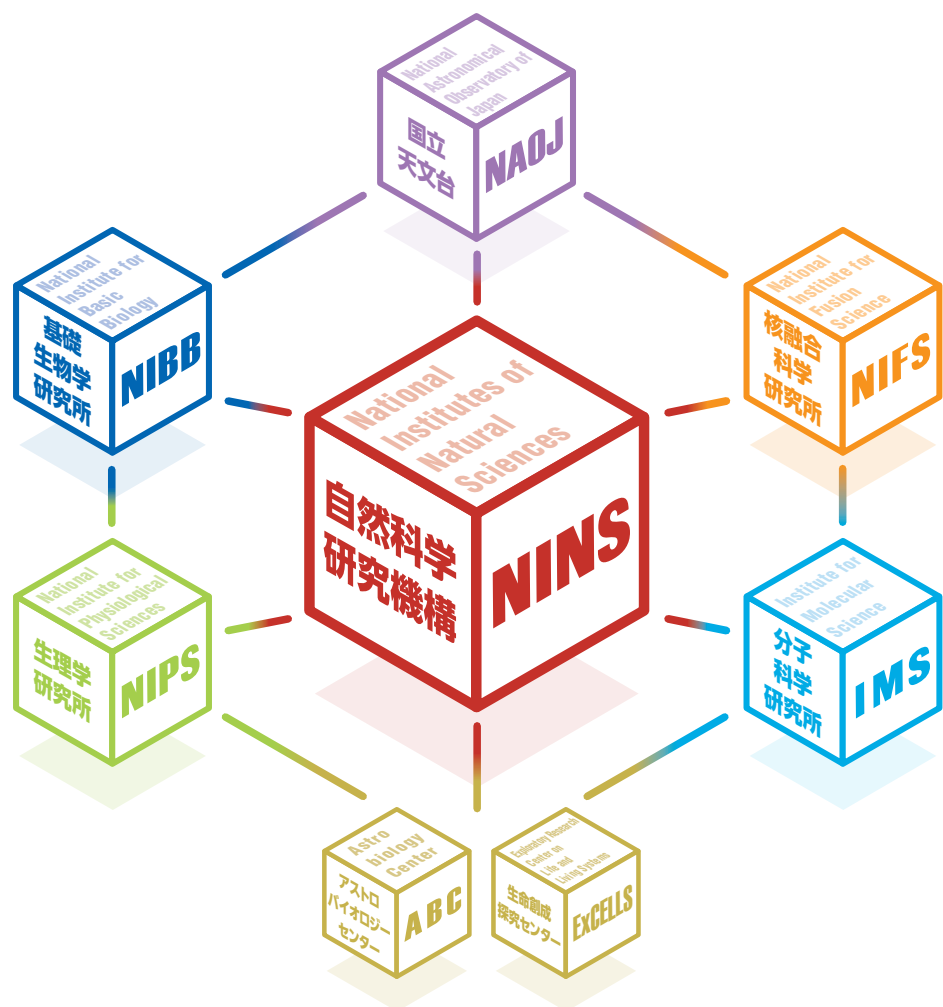
引き続き、自然科学研究機構にご支援とご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

自然科学研究機構長
川合 真紀



目次		
機構長挨拶	01	④ 研究所紹介
① 自然科学研究機構とは／ 研究者コミュニティを支えられた研究所の運営	03	国立天文台 23
② 共同利用・共同研究	05	核融合科学研究所 25
③ 自然科学研究機構の目指すところ		基礎生物学研究所 27
自然科学研究機構が推進する5つの柱	07	生理学研究所 29
共同利用・共同研究を通じた大学とのかかわり	09	分子科学研究所 31
OPEN MIX LAB (OML)事業	15	⑤ センター紹介 33
国際共同研究の推進	17	アストロバイオロジーセンター
NINSの産学連携について	19	生命創成探究センター
国民・地域とのつながり	21	⑥ 名簿 34
		組織図・沿革 35
		各種データ 36
		所在地 37
		ご寄附のお願い 38

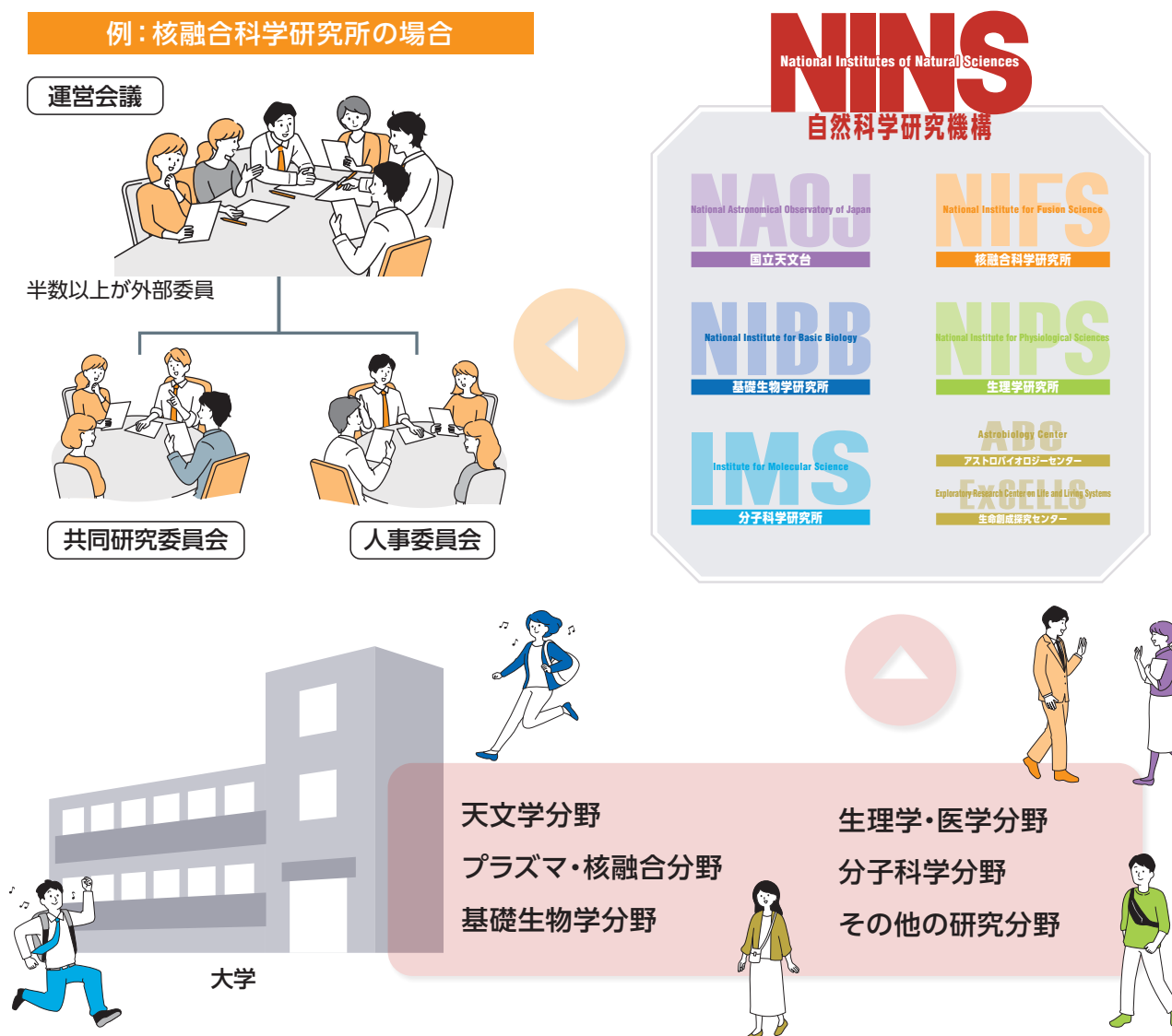
自然科学研究機構とは



自然科学研究機構 (National Institutes of Natural Sciences: NINS) は、宇宙、エネルギー、物質、生命等に係る大学共同利用機関 (国立天文台、核融合科学研究所、基礎生物学研究所、生理学研究所、分子科学研究所) と直轄センター (アストロバイオロジーセンター、生命創成探究センター) を設置・運営し、世界を牽引する最先端研究を推進する、自然科学分野の国際的研究拠点です。自然科学研究機構に所属する5研究機関と直轄センターは、全国の大学・研究機関の研究者に対し、共同利用・共同研究の場を提供し、日本の大学・研究機関の研究力強化と新たな研究分野の創成に大きく貢献しています。

研究者コミュニティに支えられた研究所の運営

自然科学研究機構を構成する大学共同利用機関は、運営会議や共同研究委員会、教員の人事委員会などへ、大学・研究機関に所属する、各研究者コミュニティを代表する研究者に多数ご参画いただいています。



特に、共同研究を採択する委員会は、構成員の半数以上が外部委員で構成されており、各々の研究分野に根ざした運営が行われています。また機構長選考・監察会議は、構成員の大半が外部委員から成るほか、経営協議会は半数以上、教育研究評議会は約半数が外部委員で構成されています。

共同利用・共同研究

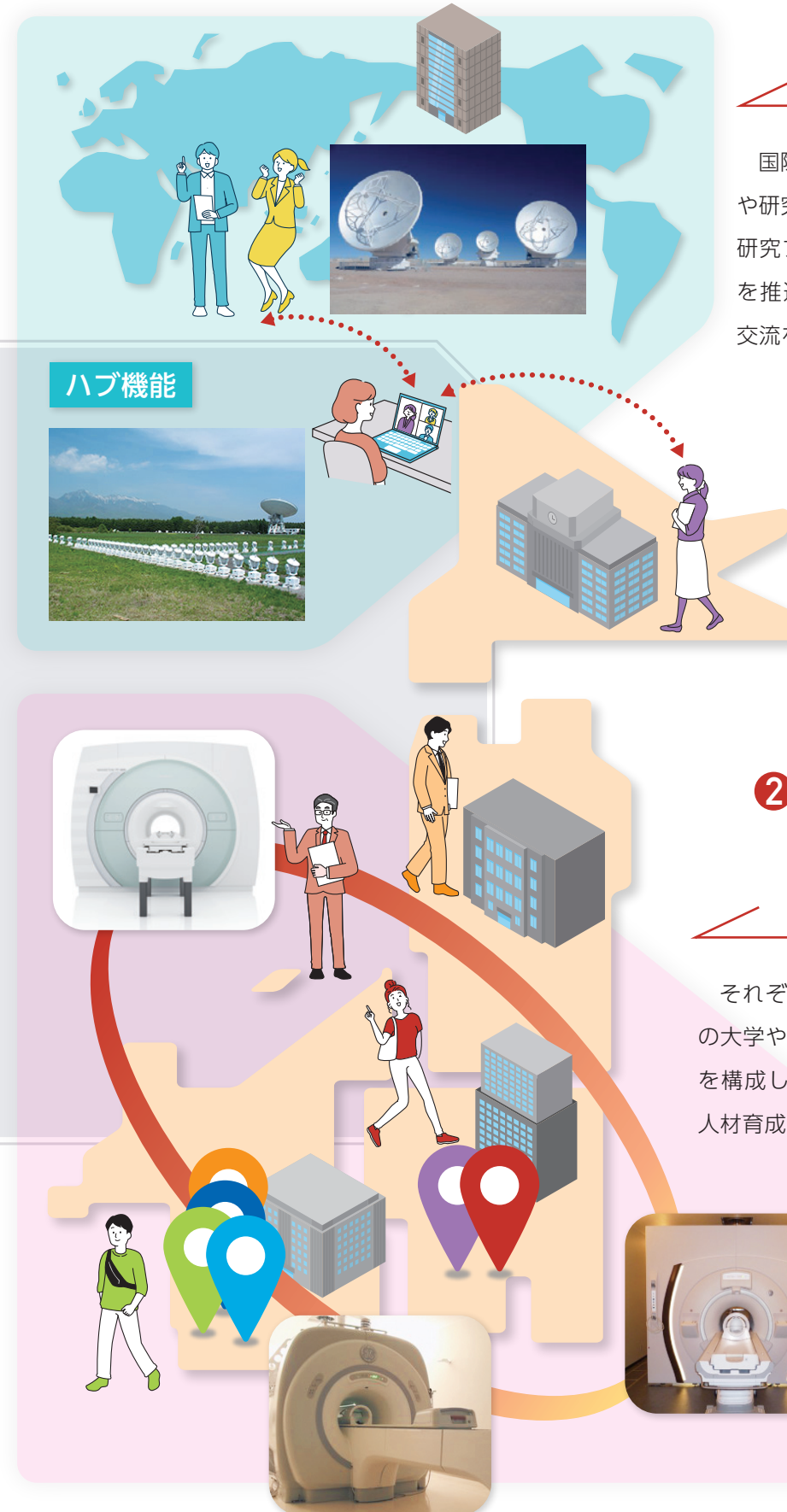
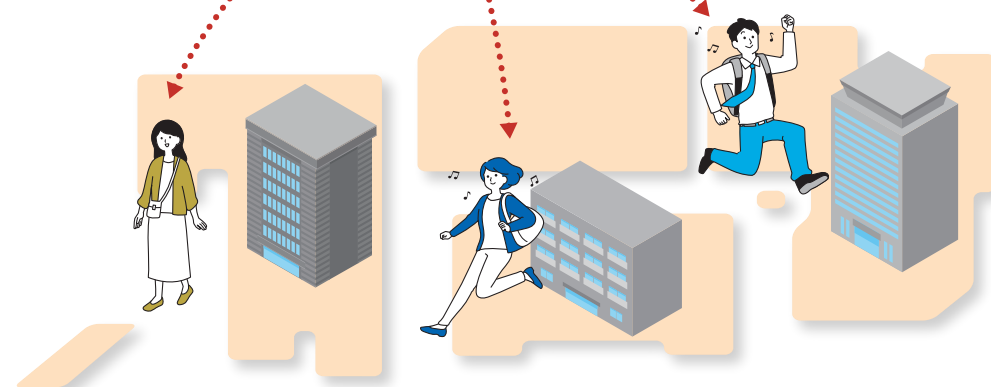
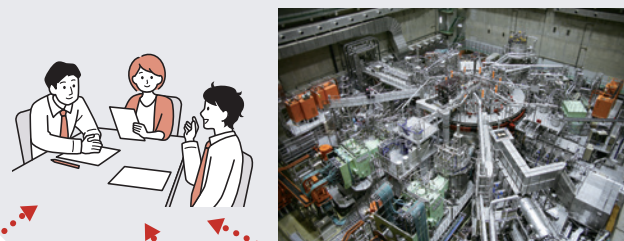
自然科学研究機構は、大学共同利用機関法人として、大学の研究力強化に貢献するため、それぞれの学術分野の特性を活かしながら、①大学の枠を越えた共同利用・共同研究、②大学に直接貢献するネットワーク型共同研究、③国際共同研究といった共同利用・共同研究を推進しています。

① 大学の枠を越えた共同利用・共同研究

個々の大学で設置・運用が困難な大型最先端研究設備の整備や、収集・保管等が難しい研究資料等の収集を行い、日本全国で実施されている最先端研究の基盤を支えています。このため自然科学研究機構の各研究機関には、全国の国公立大学や研究機関から研究者が多数集まり、所属の枠を越えた共同利用・共同研究が日々行われています。

NINS National Institutes of Natural Sciences 自然科学研究機構

NAOJ National Astronomical Observatory of Japan 国立天文台	NIFS National Institute for Fusion Science 核融合科学研究所
NIBB National Institute for Basic Biology 基礎生物学研究所	NIPS National Institute for Physiological Sciences 生理学研究所
IMS Institute for Molecular Science 分子科学研究所	ABC Astrobiology Center アストロバイオロジーセンター
	ExCELLS Exploratory Research Center on Life and Living Systems 生命創成探究センター



③ 国際共同研究

国際的な研究拠点として、国内外の大学や研究機関の人材交流のハブとなり、国際研究プロジェクトの実施や国際共同研究を推進するとともに、研究者間の活発な交流を支援しています。

ハブ機能

② 大学に直接貢献するネットワーク型共同研究

それぞれの学術分野の特性に応じて、複数の大学や研究機関からなる研究ネットワークを構成し、共同利用・共同研究の推進および人材育成を行っています。

自然科学研究機構の目指すところ



自然科学研究機構の目指すところ

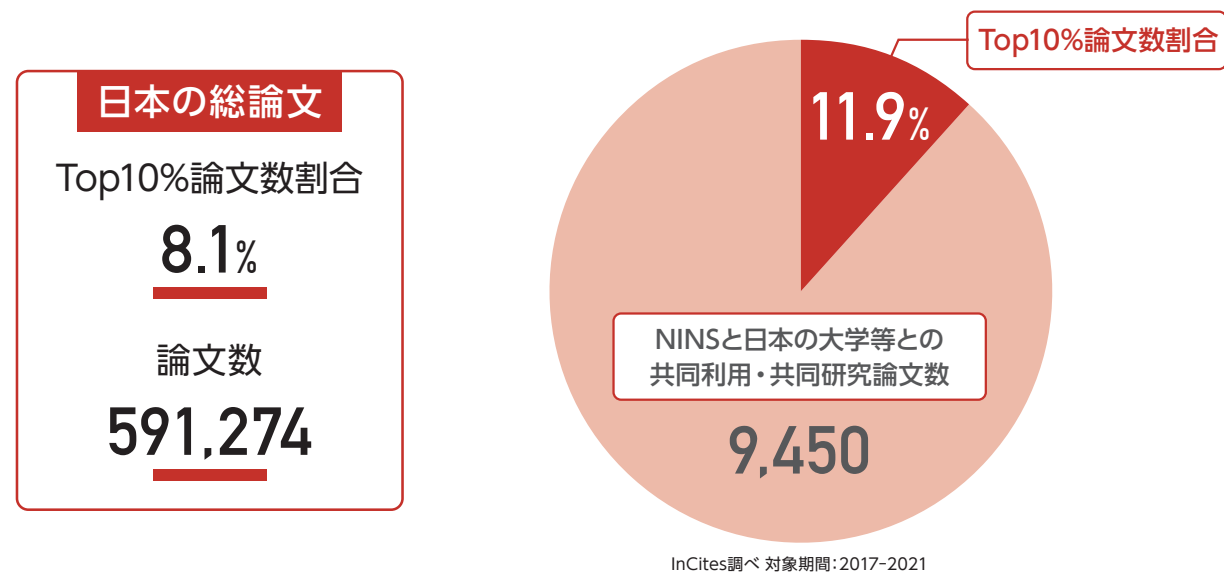
共同利用・共同研究を通じた大学とのかかわり

自然科学研究機構は、大学共同利用機関法人として、全国の国公私立大学や研究機関等から積極的に多くの研究者を受け入れ、共同利用・共同研究を進めています。また、総合研究大学院大学(総研大)の基盤機関として大学院教育を行うとともに、国公私立大学の要請に応じて、大学院学生を「特別共同利用研究員」として受け入れ研究指導を行っています。共同利用・共同研究や特別共同利用研究員制度を通じて、大学等の研究者の研究を支援することで、大学の研究力強化に貢献しています。

大学への貢献を可視化

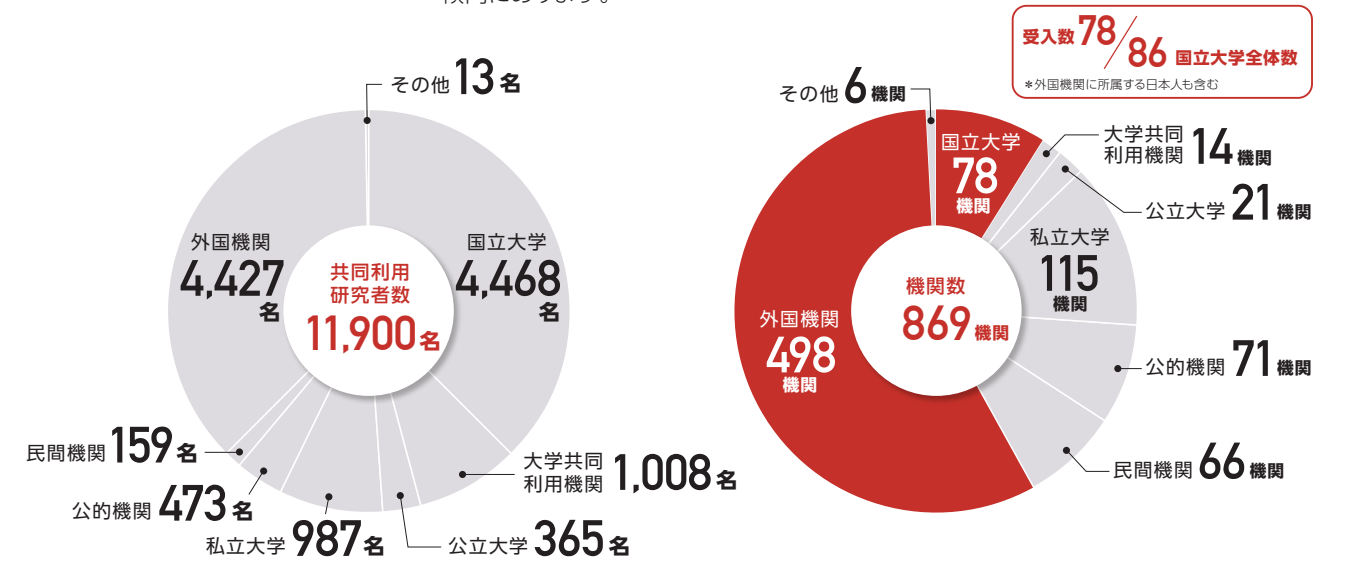
「大学の研究力強化への貢献」に対する一つの指標として、共同利用・共同研究の成果論文の被引用数分析を行っています。

2017年以降5年間を対象に、自然科学研究機構と日本の大学等との共同利用・共同研究成果を分析しました。結果、自然科学研究機構が共同利用・共同研究で携わった論文の中で、被引用数が全論文の上位10%以内にある高インパクト論文(Top10%論文)の割合は11.9%となりました。これは、日本の総論文からみたTop10%論文割合8.1%と比べても高いことを示しています。つまりこの結果は、自然科学研究機構が日本の大学における研究力強化に大きく貢献していることを示していると言えます。



共同利用の実績 (2021年度)

自然科学研究機構は、毎年多くの国公私立大学や研究機関等から、共同利用研究者を受け入れています。全国の国立大学の9割以上が自然科学研究機構での共同利用を利用しているだけでなく、近年は公立私立大学や、海外の大学・研究機関の利用も増加傾向にあります。

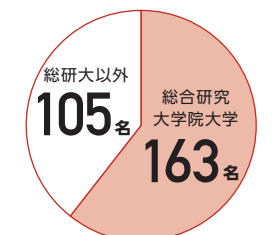


各研究所受入人数 (2021年度)

研究所名	利用人数	(うち)外国人数	機関数
国立天文台	5,743人	4,201人	524機関
核融合科学研究所	1,572人	251人	262機関
基礎生物学研究所	425人	13人	93機関
生理学研究所	650人	49人	128機関
分子科学研究所	3,110人	266人	177機関
センター等	400人	19人	131機関

大学院教育 (受け入れ学生数)

総合研究大学院大学(総研大)の基盤機関として、大学院教育を実施しています。また、全国の国公私立大学からも、特別共同利用研究員等として大学院学生(修士・博士)を受け入れています。右円グラフは2021年度実績



自然科学研究機構の目指す

ところ

共同利用・共同研究を通じた 大学とのかかわり

自然科学研究機構は、日本全国の国立大学だけでなく、多くの公立私立大学から幅広く研究者を受け入れ、共同利用・共同研究を進めています。共同利用・共同研究の結果、各大学から多くの研究成果論文が発表されています。

- 論文数は、2017-2021年の総計を対象としており、共同利用・共同研究者から報告された成果論文、およびクラリベイト・アナリティクス社研究分析ツールInCitesで検索したNINS研究者が著者に含まれる論文をカウントしています。
- ※は、InCitesに所属登録が無い機関について、エルゼビア社論文データベースScopusで論文を検索し、カウントしています。

国立大学ごとの研究者数+論文数

大学	受入人数 (2021年度)	論文数 (2017-2021)
東京大学	669	2,039
京都大学	437	961
名古屋大学	436	1,064
大阪大学	369	656
東北大学	294	535
九州大学	193	405
北海道大学	175	285
東京工業大学	127	345
筑波大学	119	285
広島大学	113	296
神戸大学	105	158
千葉大学	90	130
名古屋工業大学	84	30
総合研究大学院大学	79	2,090
静岡大学	77	87
山形大学	69	48
岡山大学	58	62
岐阜大学	58	24
富山大学	50	361
茨城大学	48	79
鹿児島大学	42	182
群馬大学	42	29
京都工芸繊維大学	41	29
奈良先端科学技術大学院大学	40	47
愛媛大学	39	194
新潟大学	39	83
福井大学	37	42
弘前大学	33	69
徳島大学	28	51
奈良女子大学	27	36
横浜国立大学	27	23
電気通信大学	26	109
山口大学	25	61
信州大学	25	77
鳥取大学	22	27
金沢大学	18	82
愛知教育大学	17	12
豊橋技術科学大学	17	15
熊本大学	17	64

大学	受入人数 (2021年度)	論文数 (2017-2021)
佐賀大学	17	7
三重大学	17	11
宇都宮大学	16	35
長岡技術科学大学	14	41
お茶の水女子大学	13	18
北陸先端科学技術大学院大学	13	19
埼玉大学	11	77
大分大学	10	22
北見工業大学	10	46
宮崎大学	10	17
琉球大学	10	52
高知大学	10	39
島根大学	10	37
宮城教育大学	9	6
山梨大学	9	34
室蘭工業大学	8	4
九州工業大学	8	18
東京農工大学	7	56
旭川医科大学	7	6
長崎大学	6	16
滋賀医科大学	4	18
大阪教育大学	4	7
香川大学	3	32
上越教育大学	3	21
福島大学	3	7
岩手大学	3	9
東京学芸大学	2	44
秋田大学	2	7
奈良教育大学	2	3
東京医科歯科大学	2	21
一橋大学	1	19
滋賀大学	1	3
筑波技術大学	1	3
北海道教育大学	1	9*
鳴門教育大学	1	—
京都教育大学	1	2
福岡教育大学	1	—
浜松医科大学	1	25
和歌山大学	1	1

公立大学ごとの研究者数+論文数

大学	受入人数 (2021年度)	論文数 (2017-2021)
大阪府立大学	118	220**
名古屋市立大学	62	151
京都府立大学	43	9
東京都立大学	33	30
兵庫県立大学	24	93
横浜市立大学	20	34
静岡県立大学	11	10

大学	受入人数 (2021年度)	論文数 (2017-2021)
岐阜薬科大学	11	1
大阪市立大学	10	220**
奈良県立医科大学	8	7
県立広島大学	5	—
福島県立医科大学	4	27
山陽小野田市立山口東京理科大学	3	5*
京都府立医科大学	3	24

大学	受入人数 (2021年度)	論文数 (2017-2021)
和歌山県立医科大学	2	7
広島市立大学	2	—
札幌医科大学	2	3
秋田県立大学	1	11
新潟県立看護大学	1	1*
公立ほこだて未来大学	1	—
京都市立芸術大学	1	—

** は大阪公立大学の論文数

私立大学ごとの研究者数+論文数

大学	受入人数 (2021年度)	論文数 (2017-2021)
慶應義塾大学	83	136
早稲田大学	68	99
東京理科大学	67	82
立命館大学	52	33
中部大学	48	78
名城大学	45	13
日本大学	44	125
関西学院大学	41	64
立教大学	30	71
東京電機大学	24	7
北里大学	23	31
東海大学	20	52
学習院大学	20	19
法政大学	18	63
同志社大学	18	43
東邦大学	15	60
日本女子大学	15	19
自治医科大学	15	44
青山学院大学	14	41
産業医科大学	12	10
埼玉工業大学	12	1
大阪産業大学	11	53
福岡大学	11	87
明治大学	11	21
藤田医科大学	11	45
甲南大学	10	97
工学院大学	9	66
近畿大学	9	63
帝京大学	9	16
中央大学	9	30
玉川大学	8	16*
順天堂大学	7	24
愛知工業大学	7	—
光産業創成大学院大学	6	18*
上智大学	6	32
国際医療福祉大学	6	2
長浜バイオ大学	6	16*
京都産業大学	5	140

大学	受入人数 (2021年度)	論文数 (2017-2021)
千葉工業大学	5	49
東洋大学	5	15
北海道医療大学	5	—
明治国際医療大学	5	—
豊田工業大学	5	13
岡山理科大学	4	39
久留米大学	4	20
神奈川大学	4	14
沖縄科学技術大学院大学	4	19
東京慈恵会医科大学	4	—
星薬科大学	4	3
大阪医科薬科大学	4	—
龍谷大学	4	41
大同大学	3	3
放送大学	3	63*
明星大学	3	38
東京都市大学	3	19
摂南大学	3	9
北海道科学大学	3	4
福岡工業大学	3	6
東京女子医科大学	3	6
岩手医科大学	3	17
愛知医科大学	3	24
兵庫医科大学	3	13
昭和大学	3	8
神奈川工科大学	3	2
豊橋創造大学	3	—
青森大学	3	—
京都女子大学	2	6
大妻女子大学	2	13*
芝浦工業大学	2	15
成蹊大学	2	2
東京薬科大学	2	11
広島工業大学	2	4
関西大学	2	9
大阪工業大学	2	32
福井工業大学	2	10*
日本工業大学	2	—

大学	受入人数 (2021年度)	論文数 (2017-2021)
愛知学泉大学	2	—
朝日大学	2	—
東北福祉大学	2	—
湘南医療大学	2	—
帝京平成大学	2	—
東京農業大学	2	8
駒澤大学	1	2*
星槎大学	1	—
北海道情報大学	1	—
関東学院大学	1	2
四国学院大学	1	5*
女子栄養大学	1	—
日本医療大学	1	—
足利大学	1	5*
岐阜医療科学大学	1	—
徳島文理大学	1	9
東京工科大学	1	19
北海学園大学	1	2
神戸薬科大学	1	2
新潟工科大学	1	—
八戸工業大学	1	1
大東文化大学	1	—
日本薬科大学	1	2*
麻布大学	1	1
中京大学	1	1
人間総合科学大学	1	—
武蔵野大学	1	—
武庫川女子大学	1	1
川崎医科大学	1	6
九州産業大学	1	4*
埼玉医科大学	1	7
静岡理工科大学	1	1*
東北医科薬科大学	1	—
北陸大学	1	—
名古屋文理大学	1	—
京都薬科大学	1	9
獨協医科大学	1	6

自然科学研究機構の目指すところ

共同利用・共同研究を通じた大学とのかかわり

自然科学研究機構は、文部科学省の大規模学術フロンティア促進事業並びに学術研究基盤事業において4つの大型国際プロジェクトを実施しています(①大型光学赤外線望遠鏡であるすばる望遠鏡の共同利用研究、②大型電波干渉計であるアルマ望遠鏡による国際共同利用研究の推進、③30メートル光学赤外線望遠鏡(TMT)計画の推進、④超高温プラズマ学術研究基盤(LHD)計画)。これら最先端の大型研究装置により、研究活動の共通基盤を提供するとともに、世界の学術研究を先導し、国際研究拠点を形成しています。

大型国際プロジェクト



すばる望遠鏡

超広視野・超高解像度観測で宇宙を俯瞰する「すばる望遠鏡」



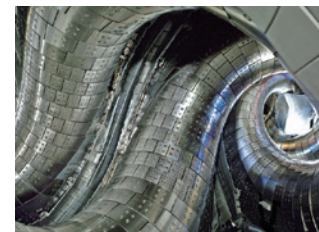
アルマ望遠鏡

国立天文台が国際協力の下で運営する「アルマ望遠鏡」



TMT計画

国立天文台が推進する「TMT計画」



大型ヘリカル装置

超高温プラズマの研究で世界を先導する「大型ヘリカル装置」

プロジェクト関連数値データ (2022年度)

大型国際プロジェクト名	利用者数 (延べ人数)	(うち)外国人数	機関数	国数
すばる望遠鏡	366人	130人	53機関	14ヶ国
アルマ望遠鏡	3,418人	2,997**人	351機関	40ヶ国
大型ヘリカル装置	610人	181人	112機関	22ヶ国

** 外国機関に所属する日本人研究者を含む

研究大学コンソーシアムの運営

自然科学研究機構は、大学の研究力向上に貢献するため様々な活動を行っています。その一環として、研究力強化に積極的に取り組む大学によって組織された「研究大学コンソーシアム(Research University Consortium)」の幹事機関を務めています。「研究大学コンソーシアム」は現在、41大学で構成され、タスクフォース(TF)活動、シンポジウムやホームページなどを通じて、大学間に共通する諸々の課題について、好事例などさまざまな情報の発信と共有、討議を行っています。

具体的な活動

① エビデンスに基づく分野をこえた研究連携に関するTF

分野融合・組織間連携の推進に向けて、各大学の研究力の特徴を多角的な視点で把握するため、必要となる関連情報・エビデンスの収集と共有、分析を目的とします。分野や機関の枠をこえた連携による研究力強化を進めるため、課題を整理し、必要となる調査(エビデンス収集)や分析を行います。

② 大学間連携による研究基盤強化TF

大学と大学共同利用機関が連携し、大学間連携による研究力強化を進めるための研究基盤の強化に関する議論を行います。自然科学研究機構・大学間設備ネットワーク事業との連携も図っていきます。

③ 連絡会

喫緊の課題など特定のトピックに関する情報共有を進めます。(トピック例:研究力分析、国際情報発信、学術情報流通 等)

④ MIRAI-DX

MIRAI-DX

MIRAI-DXとは、リサーチ・アドミニストレーター(University Research Administrator: URA)の協働による分野や機関の枠をこえたDXプラットフォームです。MIRAI-DXを用いて、分野や機関の枠をこえた連携を推進していきます。中心的な役割を担う7大学・機関(CORE7)において、プラットフォームの運用に関する検討を行っています。

シンポジウム

研究大学コンソーシアムに参加するすべての大学が集まり、年1回程度、シンポジウムを開催しています。研究力強化の方策・体制の整備等に関する研究大学群として共通する課題について、先導的な取り組みや好事例などの共有を含め、横断的に議論しています。



構成機関 (41大学・機関)

北海道大学
東北大学
筑波大学
千葉大学
東京大学
東京医科歯科大学
東京農工大学
東京工業大学
電気通信大学
一橋大学
横浜国立大学
新潟大学
富山大学
金沢大学
福井大学
信州大学
名古屋大学
名古屋工業大学
豊橋技術科学大学
京都大学
大阪大学
神戸大学
岡山大学
広島大学
山口大学
徳島大学
愛媛大学
九州大学
九州工業大学
長崎大学
熊本大学
鹿児島大学
北陸先端科学技術大学院大学
奈良先端科学技術大学院大学
東京都立大学
早稲田大学
慶應義塾大学
人間文化研究機構
自然科学研究機構
高エネルギー加速器研究機構
情報・システム研究機構

自然科学研究機構の目指すところ

OPEN MIX LAB (OML) 事業

新たな学術分野を切り拓く場の提供

自然科学研究機構では2023年度よりオープンミックスラボ (OML: Open Mix Lab) 事業を開始しました。OML事業は組織、セクター、学術分野を跨いだ分野融合・学際研究を推進するための研究プラットフォームとして構想されており、多様な研究プロジェクトを通じて先進的な研究成果を創出するとともに、新たな学術分野を切り拓く場を提供することが期待されています。

OML事業のしくみ

OML事業は大きく分けて公募研究プログラムと施設整備から構成されています。OML公募研究プログラムは従来から機構が実施してきた公募プログラムを統合・再編するかたちで発足しました。OML公募研究プログラムには以下の5つのタイプがあり、研究プロジェクトの進捗や規模に合わせたタイプを選択できるようになっています。

- ① 研究共創型 ② 若手支援型 ③ テーマ設定型 ④ 研究スタートアップ支援型 ⑤ 産学連携支援型

※いずれも2023年度公募は終了しています。

特定のテーマに沿った研究プロジェクトを公募する「テーマ設定型」が設けられたことは、従来の機構内公募プログラムにはなかったOML公募研究プログラムの特色です。今後も年度毎に新たなテーマを設定して公募を実施する予定ですが、来年度以降は機構内の意見を集約しテーマ設定に反映する仕組みを構築していく計画です。

公募研究プログラムと並んでOML事業の柱となる施設整備については、自然科学研究機構山手キャンパス (岡崎市) に最初のOML施設の整備を進めるべく調整中です。機構内外の研究者が分野融合研究や課題解決型研究連携を実施する拠点として整備される予定です。



OML公募研究プログラムメニュー

① 研究共創型

自然科学研究機構 (NINS) を含む、国内の研究機関に所属する研究者等が対象。職員と協力し実施する、組織間連携による革新的な研究を支援するためのプロジェクトです。

② 若手支援型

NINSに所属する若手研究者が対象。国内の研究機関に所属する研究者等と協力し実施する、組織間連携による革新的な研究を支援するためのプロジェクトです。

③ テーマ設定型

NINSを含む、国内の研究機関・民間企業等に所属する研究者等が対象。クロスポイントメントなどを活用し、NINSに実質的な共同研究の場を置いて交流を図りつつ、NINSに所属する職員と協力し実施するためのプロジェクトです。本プロジェクトは、機構が設定したテーマに関連した革新的な研究を支援するものです。

2023-2024年度のテーマ

テーマ1: 「全波長域の光を用いた解析・分析技術開発とその応用
(従来あまり使われていなかった波長域の活用)」

テーマ2: 「GXに資する基礎研究開発 (蓄電池, 水素, バイオモノづくり)」

④ 研究スタートアップ支援型

NINSを含む国内の研究機関に所属する研究者等が対象。NINSに所属する職員と協力し、組織間連携による革新的な研究を立ち上げるためのスタートアップ研究や、ワークショップ、予備調査を支援するためのプロジェクトです。

⑤ 産学連携支援型

NINSに所属する研究者が対象。社会課題の解決や産業応用を志向したフィージビリティ・スタディを支援するためのプロジェクトです。

具体的な支援規模や応募要件については機構のウェブサイトに掲載されている募集要領をご参照ください。

お問い合わせ先

自然科学研究機構事務局研究協力課研究支援係

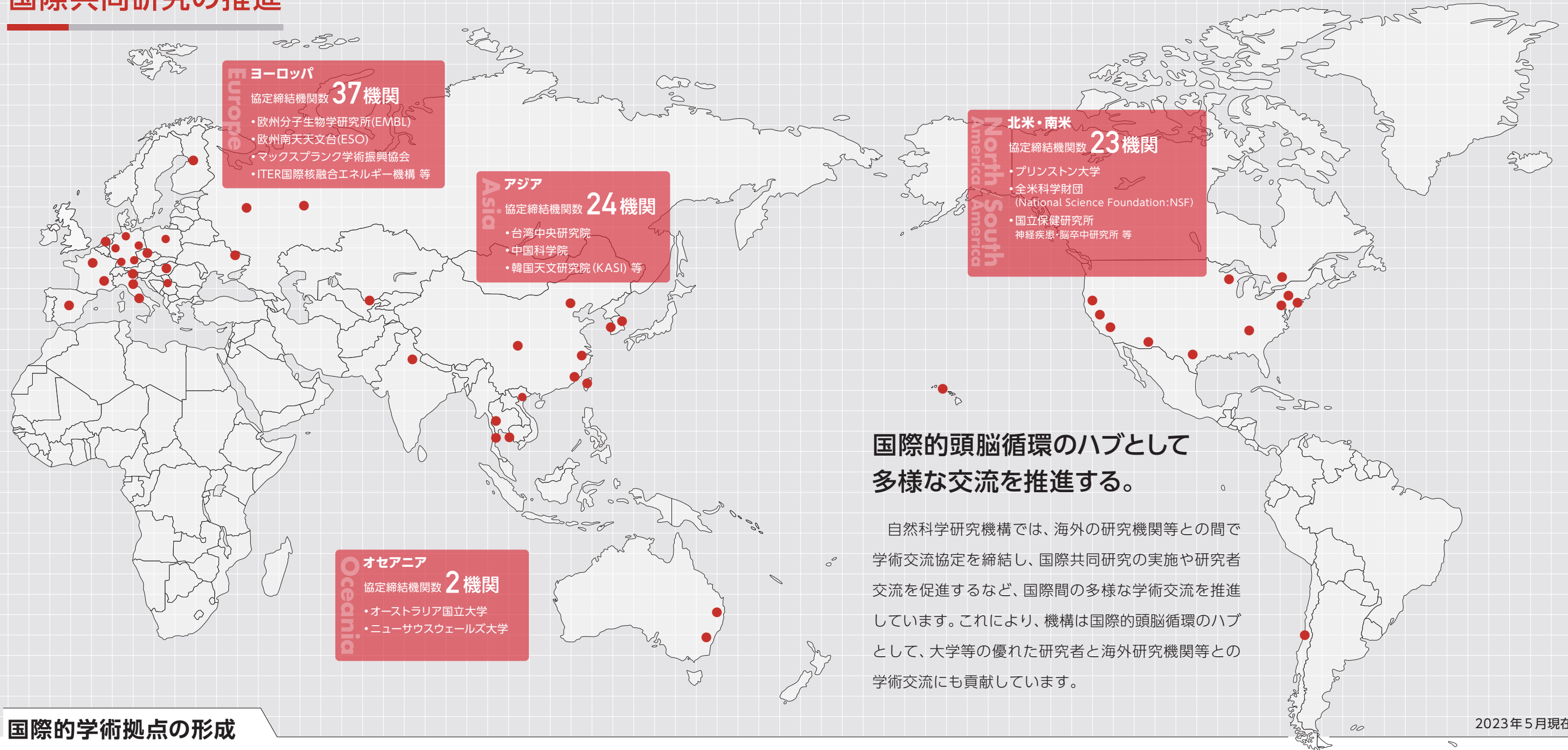
TEL.03-5425-1318 Email.nins-jr@nins.jp

<https://www.nins.jp/collabo/oml.html>



自然科学研究機構の目指すところ

国際共同研究の推進



国際的頭脳循環のハブとして 多様な交流を推進する。

自然科学研究機構では、海外の研究機関等との間で学術交流協定を締結し、国際共同研究の実施や研究者交流を促進するなど、国際間の多様な学術交流を推進しています。これにより、機構は国際的頭脳循環のハブとして、大学等の優れた研究者と海外研究機関等との学術交流にも貢献しています。

2023年5月現在

国際的学術拠点の形成

■ プリンストン大学及びマックスプランク協会傘下の研究所との連携

自然科学研究機構とプリンストン大学(アメリカ)は2010年より学術交流協定を締結し、プラズマ宇宙物理学及び定量・イメージング生物学分野の共同研究や教育活動支援、会議・シンポジウム等への相互参加などさまざまな交流を行っています。また、マックスプランク協会(ドイツ)傘下の研究所の間でも、機構協定に基づきプラズマ物理学及び天体物理学分野を中心とした研究交流を進めています。いずれも国際共同事業を促進する枠組みを強化するため、国際連携担当URAの支援の下、国際公募により採用した研究者を現地に配置しています。

■ 欧州分子生物学研究所(European Molecular Biology Laboratory : EMBL)との国際連携

EMBLはドイツのハイデルベルグに本部を置く、EU諸国を中心とした19ヶ国からの出資によって運営されている国際研究機関です。自然科学研究機構とEMBLは2005年に締結した学術協定に基づき、学術交流と人材交流、技術交流の3方面による交流を行っています。自然科学研究機構からは、主にEMBLと最も近い研究分野を担う基礎生物学研究所が中心となり、共同研究を推進しています。

自然科学研究機構の目指すところ

NINSの産学連携について

NINSの目指す産学連携

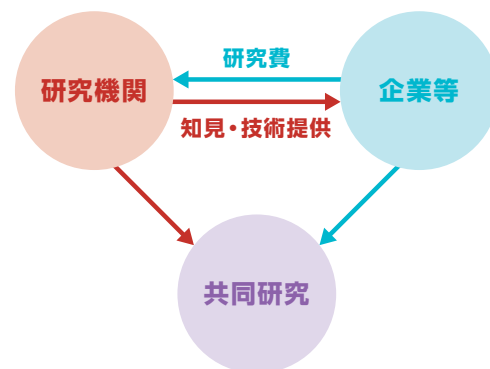
自然科学研究機構(NINS)は、全国の国公立大学や研究機関に所属する研究者のための学術研究の中核拠点を担う大学共同利用機関法人のひとつです。各々の大学では維持・管理が困難な最先端の研究施設や研究機器、膨大な学術資料などの知的基盤、そしてこれらを利用する上で必要な知識を持つ人的リソースを有し、全国の研究者へ共同研究や新分野開拓の場を提供しています。

NINSは創設以降、これらの先導的かつ効果的な共同研究活動の実施によって、日本の学術研究の発展に貢献するとともに、大学共同利用機関としての使命を果たしてきました。NINSは今、我々の積み重ねてきた歴史と実績をもって、日本の産業界を担う皆様の研究ニーズに応えていきたいと考えています。



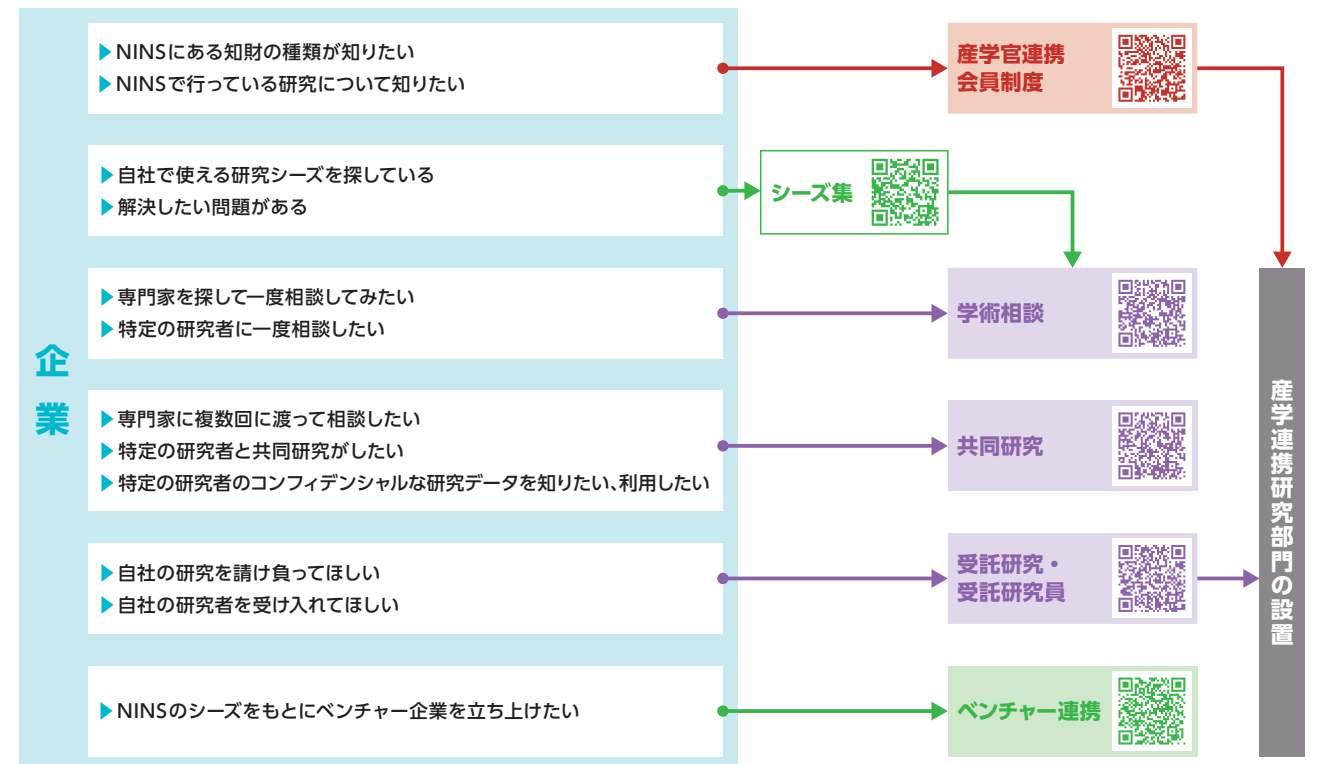
産学連携のしくみ

NINSが実施する学術研究の成果を産業界で活用していただくとともに、産業界のニーズに応える研究開発を行います。NINSでは学術相談、共同研究、受託研究等の契約に基づいて産学連携を推進しています。また産業界とのネットワーク醸成を目的としてNINS産学官連携会員制度を運用しています。詳細はNINSの産学連携制度をご参照ください。



NINSの産学連携制度

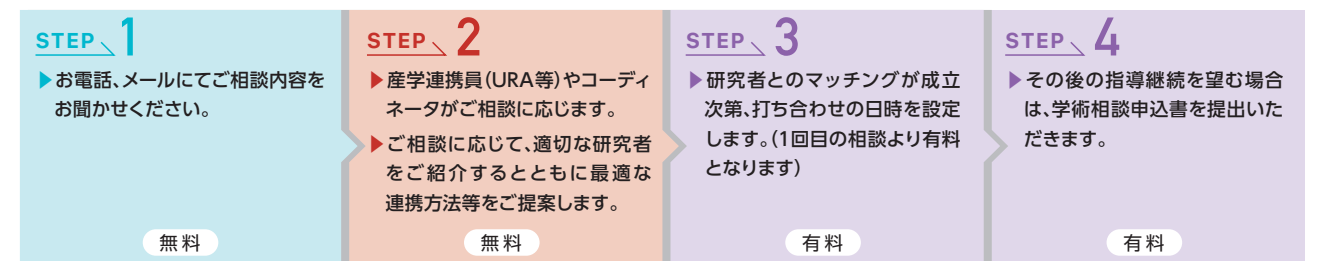
NINSでは学術相談、共同研究、受託研究等の契約に基づいて産学連携を推進しています。また産業界とのネットワーク醸成を目的としてNINS産学官連携会員制度を運用しています。



※機構のライセンスの使用・知的財産および機関の設備・共用機器利用については産学連携担当にご相談ください。

産学連携の受け入れフロー

NINSとの共同研究等を希望される場合には事前に担当研究者もしくは産学連携担当までご相談ください。ご要望に応じて学術相談や共同・受託研究契約等の手続きをご案内させていただきます。



お問い合わせ先

自然科学研究機構事務局研究協力課研究支援係

TEL.03-5425-1318 Email.nins-sangaku@nins.jp

<https://innovation.nins.jp/>



自然科学研究機構の目指すところ

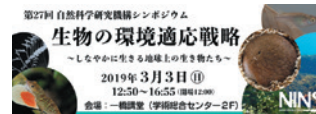
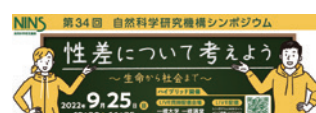
国民・地域とのつながり

自然科学研究機構では、最先端研究成果などの情報発信を通じた国民の皆さんとの対話や、地域の皆さんとのつながりに積極的に取り組んでいます。

自然科学研究機構シンポジウムの開催

自然科学研究機構はこれまで、天文学、核融合科学、分子科学、生物学、医学生理学などの研究に加え、分野を越えた融合研究の場を積極的に創出し、自然科学研究の新分野開拓を推進してきました。自然科学研究機構が担う自然科学研究分野の意義や楽しさを、より多くの皆様へいち早くお届けするべく、私たちは自然科学研究機構シンポジウムを開催しています(年2回)。

開催回	開催日	テーマ	場所
第36回	2023/9/24	データ蒐集家と散策する ～ビッグデータと人は どのように寄り添って生きていくか～	多摩六都科学館 (ハイブリッド開催)
第35回	2023/3/12	自然の中に潜む 不確実性とは何か? ～科学の目で見た持続可能性～	東京大学大講堂(安田講堂) (ハイブリッド開催)
第34回	2022/9/25	性差について考えよう ～生命から社会まで～	一橋講堂 (学術総合センター2階) (ハイブリッド開催)
第33回	2022/3/13	宇宙と、分子と、私たち	オンライン開催
第32回	2021/8/21	生命科学とプラズマ工学が つくる未来	日本橋ライフサイエンス ビルディング2階 (ハイブリッド開催)
第31回	2021/3/13	生きているとは何か?	オンライン開催
第30回	2020/9/26	宇宙科学と生命科学の 深～いつながり	オンライン開催
第29回	2020/3/14	秘められた力を引き出す ～体・心・運動～	新型コロナウイルスの 感染拡大の影響により中止
第28回	2019/8/24	SF/未来/科学技術 ～科学技術は夢見た未来を創れるか～	東京国際交流館 (プラザ平成 3階) 国際交流会議場
第27回	2019/3/3	生物の環境適応戦略 ～しなやかに生きる地球上の生き物たち～	一橋講堂 (学術総合センター2階)



自然科学研究機構若手研究者賞受賞記念講演

自然科学研究機構では、新しい自然科学分野の創成に熱心に取り組み成果をあげた優秀な若手研究者を対象として毎年「自然科学研究機構若手研究者賞」を授与しています。本賞の授賞式に伴い、受賞者5名による講演会を開催しています。様々な分野の最先端の研究について紹介する、高校生から大人までお楽しみいただける一般講演です。また講演会終了後には、受賞者たちの研究内容を実際に目で見たり、受賞者たちと直接お話しできる場として「ミート・ザ・レクチャラーズ」を設けています。

科学記者・メディアとのつながり

科学記者やメディアの皆様に向けて、自然科学研究に関する最新のトピックスを紹介するための「機構長プレス懇談会」を開催しています。懇談会では、最新の研究成果を発表したばかりの研究者たちが登壇し、研究分野に関するセミナーや意見交換を実施します。



研究所一般公開

自然科学研究機構の5つの研究機関では、定期的に一般公開を開催しています。第一線で活躍する研究者や技術職員から、各研究機関が担う最先端の研究成果や、実際に日々運用されている最先端設備などを実際に見学・体験することができます。

大隅良典特別栄誉教授 ノーベル賞受賞および記念モニュメント

大隅良典自然科学研究機構特別栄誉教授は、基礎生物学研究所における13年間の研究を含めた「オートファジー」研究の成果により、2016年ノーベル生理学・医学賞を受賞しました。この功績を記念し、「酵母細胞のオートファジー」をモチーフとした記念のモニュメントが、基礎生物学研究所に設置されています。





国立天文台

天文学は人類最古の学問のひとつです。そこには、宇宙の構造を知ることを通して、自らの成り立ちを明らかにしたいという、人類が持つ根源的な欲求が込められています。国立天文台は、常に新しい観測手段に挑戦し、地球・太陽系天体から太陽・恒星・銀河・銀河団・膨張宇宙にいたる宇宙の諸天体・諸現象についての観測と理論研究を深めることによって、人類の知的基盤をより豊かなものとし、宇宙・地球・生命を一体として捉える新たな自然観創生の役割を果たしたいと考えています。

National Astronomical Observatory of Japan



M87銀河中心のブラックホールシャドウ。アルマ望遠鏡もこの観測に参加しました。
(Credit: EHT collaboration)

Chapter 4

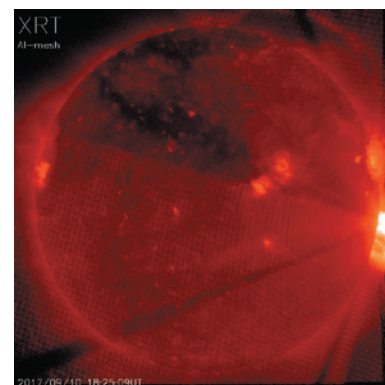
アルマ望遠鏡空撮
(Clem & Adri Bacri-Normier(wingsforscience.com)/ESO)

Topics of Research

研究トピックス

01 太陽観測衛星「ひので」が見た太陽

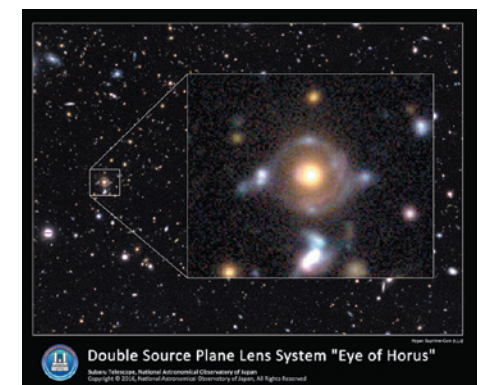
太陽観測衛星「ひので」は、2006年の打ち上げ以来10年以上にわたって、太陽の活動を観測し続けています。私たちに最も近い恒星である太陽は、地球上で生命が育まれるために不可欠な存在であるとともに、私たちの活動や環境に多大な影響を及ぼしています。「ひので」のデータは観測後すぐに公開され、世界中の太陽や宇宙環境の研究に役立っています。



2017年9月11日(日本時間)に発生した巨大フレア(右端)
(Credit: 国立天文台/JAXA/MSU)

02 重力レンズ天体「ホルスの目」

すばる望遠鏡の超広視野主焦点カメラHSCによって、広範囲の天空が高解像度で観測され暗い天体まで捉えられるようになりました。「ホルスの目」はその一環で発見された天体です。遠くにある2つの銀河からの光が、手前の銀河の重力によって曲げられ、奇妙な形に見えています。銀河の基本的な性質や宇宙膨張の歴史に迫るための鍵となる貴重な天体です。



「ホルスの目」周辺の疑似カラー画像
(Credit: 国立天文台)

National Institute for Fusion Science

核融合は宇宙における元素合成とエネルギー発生の基本メカニズムであり、星の活動を支えるエネルギー源になっています。私たちの地球環境も太陽の核融合エネルギーによって維持されています。核融合科学研究所は、核融合エネルギーを私たちが利用できる形で実現するために必要となるプラズマ物理をはじめ、ミクロな量子プロセスや材料科学、装置を構成する機器の工学技術まで、様々な研究課題に取り組んでいます。

大学共同利用機関として、大型ヘリカル装置(LHD)やスーパーコンピュータなど、大型の研究施設をはじめ、様々な研究装置群を共同利用に供し、国内外の大学や研究機関との共同研究を進めることで、核融合科学の発展とともに、広く科学技術の基盤形成を推進しています。

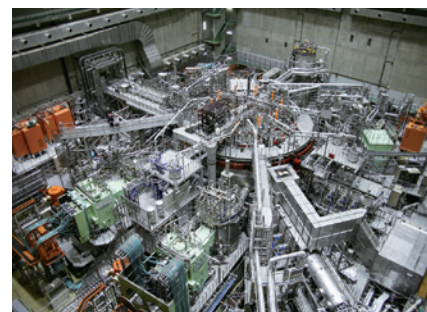
プラズマを閉じ込める真空容器内部

Topics of Research

研究トピックス

01 学術研究基盤としての大型ヘリカル装置

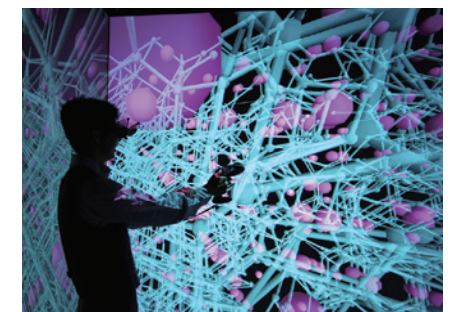
大型ヘリカル装置(LHD)は、世界最大級の超伝導プラズマ閉じ込め実験装置です。超高温プラズマを安定に生成できるLHDにおいて、多様な高精度計測装置を用いてプラズマの内部構造を計ることによって、核融合に限らず宇宙・天体プラズマにも共通する様々な複雑現象の原理に迫る国際共同研究を実施します。



LHDの全景。直径13メートル、高さ9メートルのLHD本体の周りには、プラズマの加熱装置や計測装置が多数配置されています。

02 プラズマの計算機シミュレーション

核融合プラズマ中には、構成粒子である電子やイオンの運動に起因したミクロスケールの現象から、それらが集団として動くことによって生まれる装置サイズのマクロスケールの流体现象や、輸送現象までの多数の異なる時空間スケールをもつ現象が混在しています。これらの複雑な現象をスーパーコンピュータの中に再現し、核融合プラズマ現象を支配する物理法則の理解、更には装置規模でのプラズマ挙動を予測することを目指したシミュレーション研究を行っています。



プラズマからの熱・粒子を受け止めるダイバータ材料の内部で、水素が拡散する様子のシミュレーションを可視化しています。



基礎生物学研究所

宇宙にある無数の星の中で地球の最大の特徴は、多種多様な生物に満ちていることです。約40億年の年月の間に、生物は多彩な姿と驚くような能力を獲得し、子孫をふやしてきました。基礎生物学研究所は、遺伝子・細胞・組織・個体・異種生物間の相互作用など、多階層における研究技術・手法の開発を推進し、多くの生物に共通する基本的な仕組み、生物が多様性をもつに至った仕組み、及び生物が環境に適応する仕組みを解き明かす研究を、国内外の研究者と連携して行っています。

National Institute for Basic Biology

Topics of Research

研究トピックス

01 超階層生物学の推進

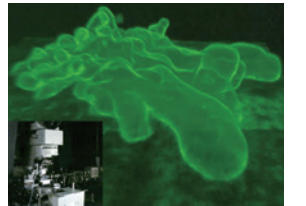
生物が示す現象は、遺伝子から個体群にいたる各階層の複雑なネットワークの総和として現れるため、生物現象の本質的な理解には階層を超える解析が必要です。しかし、多階層の時空間スケールにわたる各種のデータを統合して解析するには、人間の処理能力に頼った解析だけでは限界があります。そこで、基礎生物学研究所では、2022年4月に超階層生物学センター設立し、AI解析を導入して人間の認知能力では処理できない多階層にわたる膨大なデータをシステムとしてつなぎ、生命現象を理解する「超階層生物学」を推進しています。



超階層生物学センター

02 統合バイオイメーjing

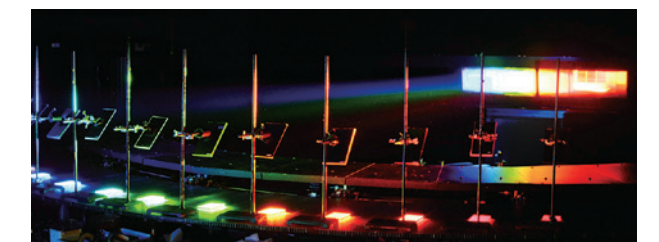
基礎生物学研究所では、光シート顕微鏡技術、二光子顕微鏡、IR-LEGO顕微鏡等の先端顕微鏡を用いた観察および光操作技術の高度化をはかるとともに、取得された画像を解析する画像処理技術および統計処理のための新規画像解析技術開発を進めています。また、共同利用研究や、先端バイオイメーjing支援プラットフォーム(ABIS)を通じて、実験デザイン、画像取得からデータ解析までを統合的にサポートする活動を、国内外の研究者に向けて提供しています。



光シート顕微鏡で捉えたアメーバの動き

03 大型スペクトログラフで光と生物との関係性を探る

大型スペクトログラフは、世界最大の大型分光照射施設で、波長250~1000ナノメートルの紫外・可視・赤外光を全長約10メートルの馬蹄型の焦点局面に分散させ、強い単色光を照射することが可能です。光合成の調節機構や光受容体の機能解析など、光の波長と生物の反応と関係性を調べる研究に活用されています。



大型スペクトログラフ

研究対象の様々な生物たち

National Institute for Physiological Sciences



ヒト脳の神経線維走行



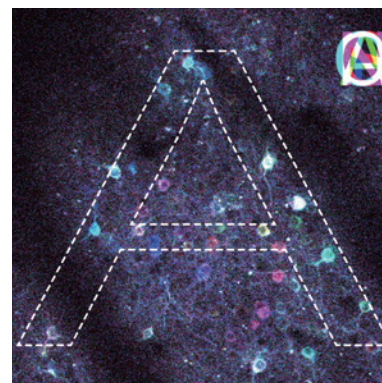
生理学研究所は、ヒトのからだ、とりわけ脳の働きに関する最先端の研究を推進し、国内外の研究者と共同研究を行い、大学院生を含む若手研究者の育成を行う研究機関です。分子・細胞からヒト個体のレベルに至る様々なからだの仕組みを理解する多様な研究を支えるため、多くの世界最先端の測定装置が設置されています。生理学研究所は、これらの計測機器の測定・解析技術の向上に努め、国内外の研究者へ装置と測定技術を幅広く供することで、日本の生理学研究の中核を担っています。

Topics of Research

研究トピックス

01 2光子ホログラフィック顕微鏡による細胞計測・操作

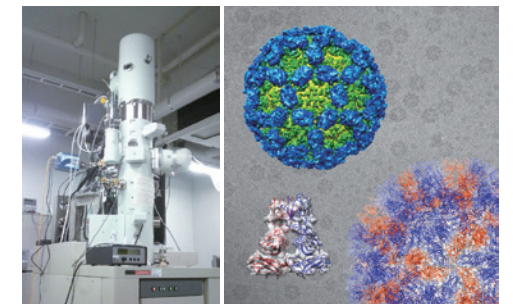
デジタルホログラフィック技術と2光子顕微鏡と組み合わせて構築した顕微鏡。レーザーを自在な形で照射することが可能です。これを光遺伝学による細胞活動操作法(オプトジェネティクス)と組み合わせ、照射した細胞活動の計測・操作を生体動物で行うことができます。これによって炎症性疼痛モデルの痛み細胞の同定や、パターン刺激から痛みが慢性化する際の神経回路の特徴、さらには局所神経回路の機能結合強度の変化を明らかにしました (Okada et al., Sci. Adv., 2021)。



生体マウスにおいて、文字の形に細胞活動を誘導した例(X. Quan et al., Opt. Lett., 2018)。

02 位相差クライオ電子顕微鏡

タンパク質粒子やウイルス、細胞小器官などの生物試料を急速凍結により厚さ数ナノメートルの非晶質の氷に包埋し、凍ったまま高真空の電子顕微鏡内に装填して最小量の電子線で観察します。このような少ない電子線量による無固定・無染色の生物試料の電顕像は、コントラストが低くなるため、必要に応じて電子顕微鏡用位相板を挿入して位相コントラストを回復します。



低温位相差電子顕微鏡と撮影されたサポウイルスキャプシド(殻)の画像(背景)。手前は構造と分子モデル。

Institute for Molecular Science



分子科学研究所

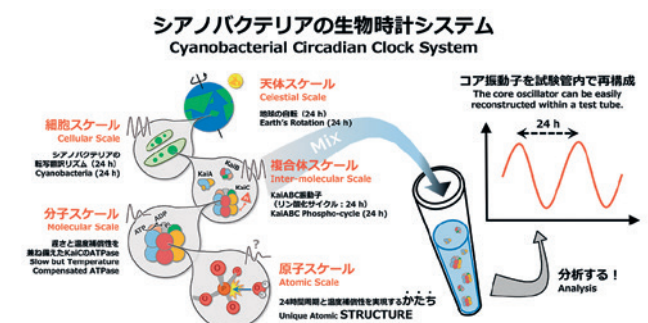
分子科学は、分子がその姿を変化させる化学反応や分子間相互作用の本質を、理論と実験の両面から明らかにすることを目的とした学問です。分子科学研究所では、理論・計算、光、物質、生命・錯体を扱う4つの基盤研究領域に加えて、協奏分子システム研究センター、メゾスコピック計測研究センターを設置し、最先端の技術や装置が利用できる共同研究の場を国内外の研究者に提供し続けています。また、全国の72国立大学法人と連携し、大学・公的研究機関・民間企業の研究者が各参画組織の所有設備を安価に共同利用できるシステム(大学連携研究設備ネットワーク)を構築しています。

Topics of Research

研究トピックス

01 「分子」と「分子システム」をつなぐロジックを解析し、斬新な分子システムを創成する

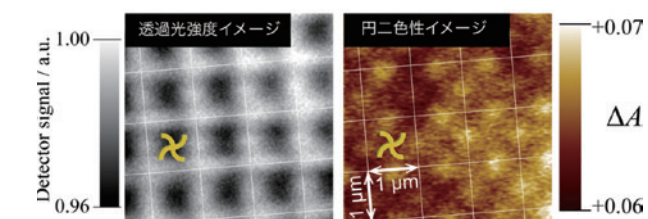
協奏分子システム研究センターでは、「分子それぞれの性質が高次構造を持つ分子システムの卓越した機能発現にどう結びつくのか」という学問横断的な重要課題に取り組んでいます。生命システムを手本に「個」と「集団」を結ぶ階層間ロジックを学び、分子システムがエネルギー・情報を協奏的に交換することによって物質変換・エネルギー変換・生命的活動などの諸機能を発現する原理の解明を目指しています。「柔軟かつ堅牢で卓越した機能を持つ分子システム」創成の拠点として共同利用・共同研究を推進し、学問や社会へ貢献することを目的としています。



シアノバクテリアの生物時計システム

02 光で、分子の姿を捉える

分子がその機能を発揮する場の多くは、分子が単一のものとして存在しているのではなく、いくつかの種類の分子が集まり、分子のミクロな性質と集団としてのマクロな性質が影響を及ぼし合って、特徴的な機能を発現しています。このようなミクロとマクロの性質が影響を及ぼし合う時間・空間領域(メゾスコピック領域)の特性を解明・制御・開拓していくには、メゾスコピック領域の計測法を独自に開拓し、様々な系に適用することが重要との考えから、2017年4月に「メゾスコピック計測研究センター」を設置しました。理論解析、光源開発、そして新たな計測法開拓、それらの応用までを含めた基礎研究基盤の提供を目指して活動しています。



開発した高精度円二色性顕微鏡によるキラル金ナノ構造試料のイメージ(回折限界を見かけ上超える分解能を実現)

極端紫外光研究施設(UVSR)

名簿

List

2023年4月現在

機構長

氏名	職名
川合 眞紀	機構長

監事

氏名	職名
小川 雄一	監事
二宮 博正	監事

教育研究評議会評議員

氏名	職名
伊藤 公孝	中部大学総長補佐/顧問
井上 和秀	九州大学高等研究院特別主幹教授
小谷 元子	東北大学理事/副学長
小間 篤	東京大学名誉教授、元秋田県立大学学長
永田 和宏	JT生命誌研究館館長
永原 裕子	東京工業大学地球生命研究所フェロー
永田 敬	総合研究大学院大学学長
早坂 忠裕	東北大学大学院理学研究科教授 JAXA地球観測研究センター参与
福田 裕穂	秋田県立大学理事/学長
松本 吉泰	京都大学名誉教授
川合 眞紀	自然科学研究機構機構長
渡邊 五郎	自然科学研究機構理事・事務局長
井本 敬二	自然科学研究機構理事
古屋 輝夫	自然科学研究機構理事
高柳 英明	自然科学研究機構理事
常田 佐久	自然科学研究機構国立天文台長
吉田 善章	自然科学研究機構核融合科学研究所長
阿形 清和	自然科学研究機構基礎生物学研究所長
鍋倉 淳一	自然科学研究機構生理学研究所長
渡辺 芳人	自然科学研究機構分子科学研究所長
吉田 道利	自然科学研究機構国立天文台副台長
藤堂 泰	自然科学研究機構核融合科学研究所副所長
皆川 純	自然科学研究機構基礎生物学研究所副所長
久保 義弘	自然科学研究機構生理学研究所副所長
山本 浩史	自然科学研究機構分子科学研究所研究総主幹

理事・副機構長

氏名	職名
渡邊 五郎	理事・事務局長
井本 敬二	理事・共創戦略統括本部長
古屋 輝夫	理事
常田 佐久	理事・副機構長・国立天文台長
阿形 清和	理事・副機構長・基礎生物学研究所長
高柳 英明	理事
吉田 善章	副機構長・核融合科学研究所長
鍋倉 淳一	副機構長・生理学研究所長
渡辺 芳人	副機構長・分子科学研究所長

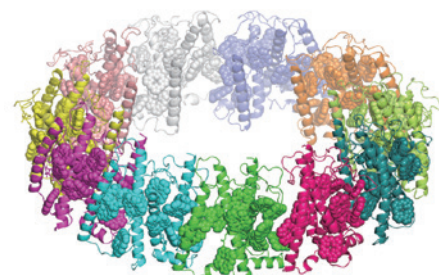
経営協議会委員

氏名	職名
石原 修	中部大学名誉教授(元学長)、 横浜国立大学名誉教授
長我部信行	日立製作所コネクティブインダストリーズ事業統括 本部事業戦略統括本部 副統括本部長
角南 篤	笹川平和財団理事長、 政策研究大学院大学学長特命補佐/客員教授
高橋真理子	ジャーナリスト、元朝日新聞科学コーディネーター
高柳 雄一	多摩六都科学館館長
田島 保英	一般財団法人高度情報科学技術研究機構理事長
中釜 齊	国立がん研究センター理事長
中西 友子	東京大学大学院農学生命科学研究科特任教授
西村いくこ	奈良国立大学機構理事、 奈良先端科学技術大学院大学理事、 京都大学名誉教授、甲南大学名誉教授
橋本 和仁	科学技術振興機構理事長
結城 章夫	学校法人富澤学園理事長、 山形大学名誉教授(元学長)、元文部科学事務次官
長谷川眞理子	日本芸術文化振興会理事長
川合 眞紀	自然科学研究機構機構長
渡邊 五郎	自然科学研究機構理事・事務局長
井本 敬二	自然科学研究機構理事
古屋 輝夫	自然科学研究機構理事
高柳 英明	自然科学研究機構理事
常田 佐久	自然科学研究機構国立天文台長
吉田 善章	自然科学研究機構核融合科学研究所長
阿形 清和	自然科学研究機構基礎生物学研究所長
鍋倉 淳一	自然科学研究機構生理学研究所長
渡辺 芳人	自然科学研究機構分子科学研究所長



アストロバイオロジーセンター Astrobiology Center

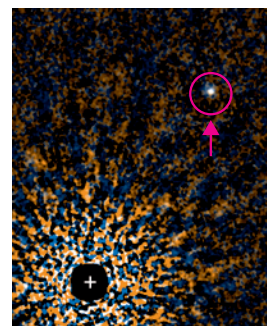
アストロバイオロジーセンター(ABC)は、太陽系外惑星や、宇宙にいるかもしれない生物についての学際的研究を推進するために、2015年に設立されました。近年の太陽系外惑星観測の進展を契機に、「宇宙における生命」を科学的に調査し、その謎を解き明かすアストロバイオロジーの研究が喫緊の課題となっています。自然科学研究機構のアストロバイオロジーセンターは、異分野融合によりこの分野を発展させ、太陽系外の惑星探査、太陽系内外の生命探査、それらの探査のための装置開発を推進しています。



南極の藻類が赤外線での光合成をするために使われるタンパク質の構造



生命を宿せる系外惑星を探査する赤外線分光器IRD



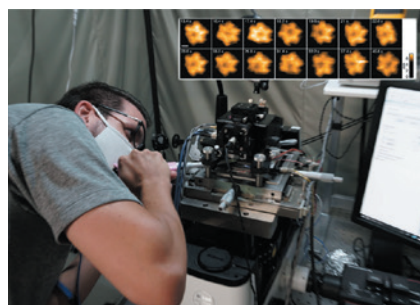
木星の4倍程度の質量を持つ系外惑星GJ504b(右上)

お問い合わせ窓口 アストロバイオロジーセンター abc-office@abc-nins.jp



生命創成探究センター Exploratory Research Center on Life and Living Systems

生命創成探究センターは「生きているとは何か?」という人類の根源的な問いの解明に向けて、生命の本質の理解を目指した研究を進めるべく、2018年4月に設立されました。最先端機器で生物を観察し(みる)、最新手法でデータを解析して(よむ)、生命の仕組みの解明を目指します。さらに構成的アプローチを取り入れ(つくる)、生命システムの本質に迫ります。「みる・よむ・つくる」のアプローチを基軸に、極限環境生命の研究者とも協力しながら、異分野融合型の研究を進め、生命の設計原理を探究しています。



高速AFM/光学顕微鏡複合機によってタンパク質から細胞まで様々な生体分子の動態が可視化できます。また、光学顕微鏡との組み合わせも可能です。



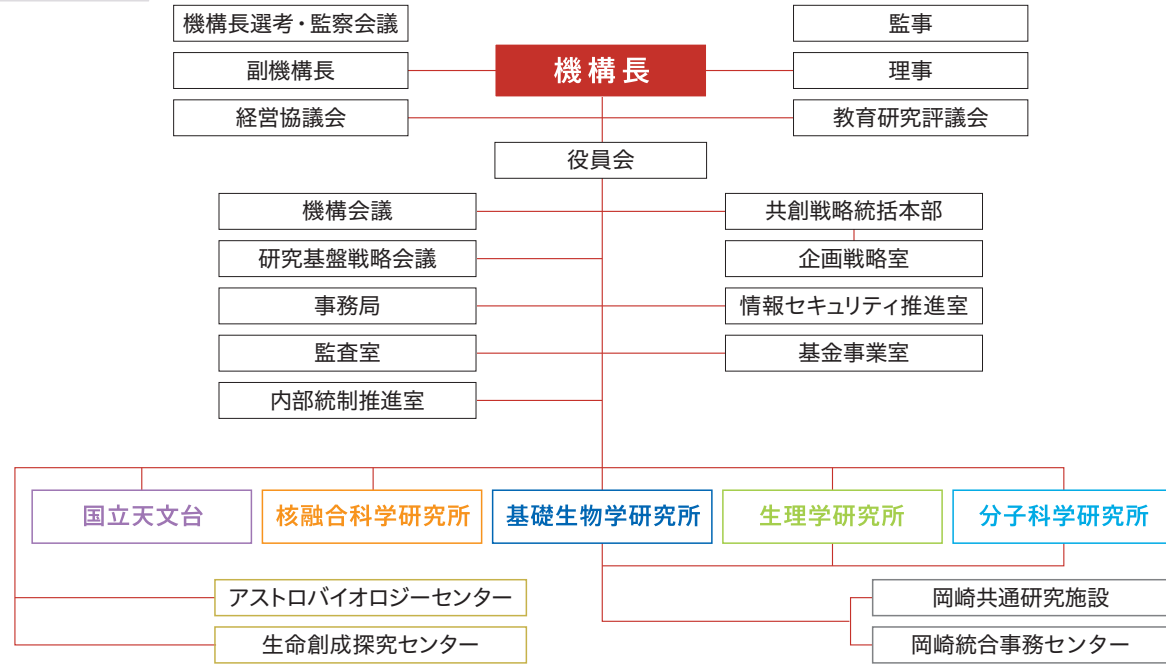
電子顕微鏡で撮影したクマムシ

お問い合わせ窓口 生命創成探究センター info@excells.orion.ac.jp



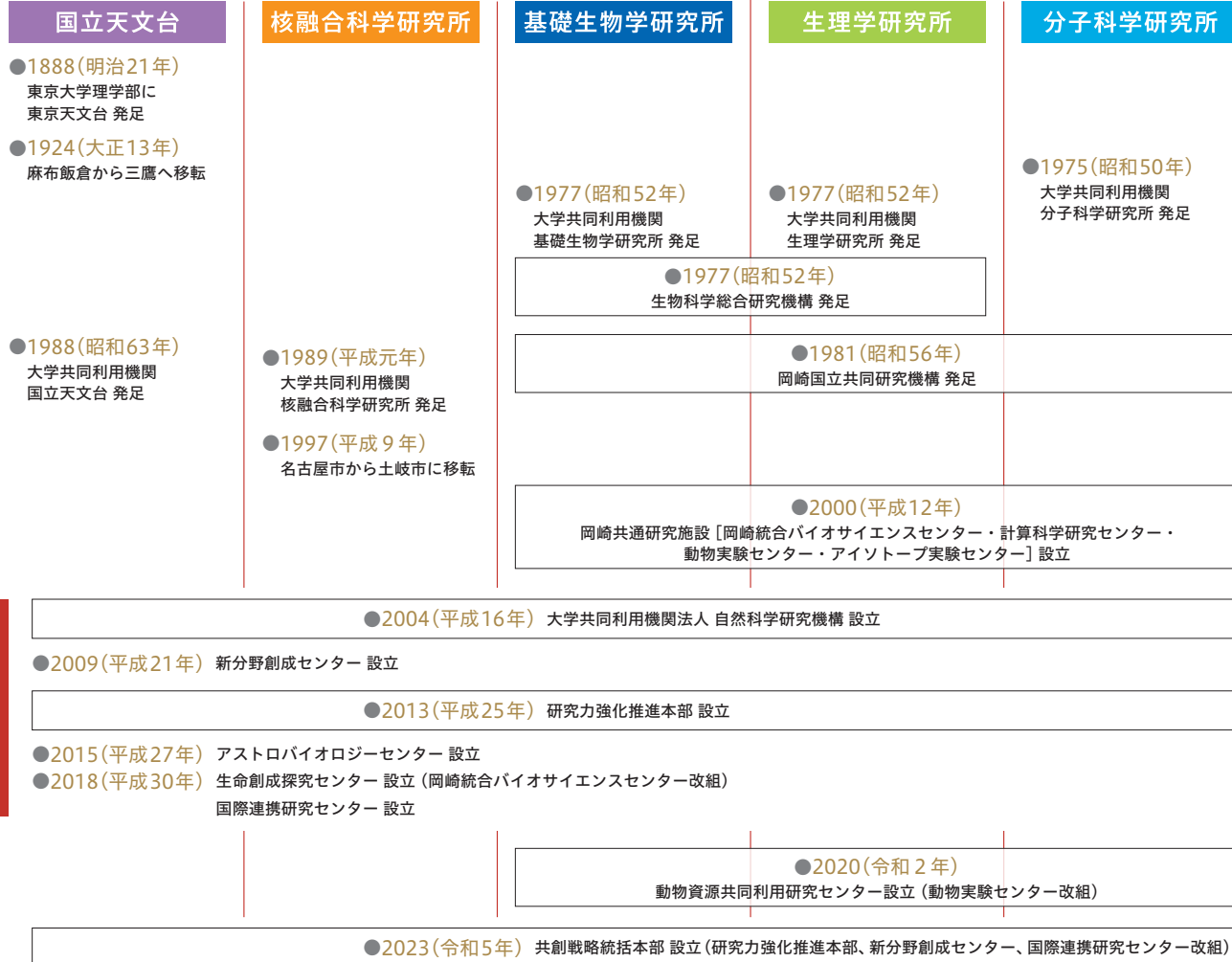
組織図

Organization chart



沿革

History



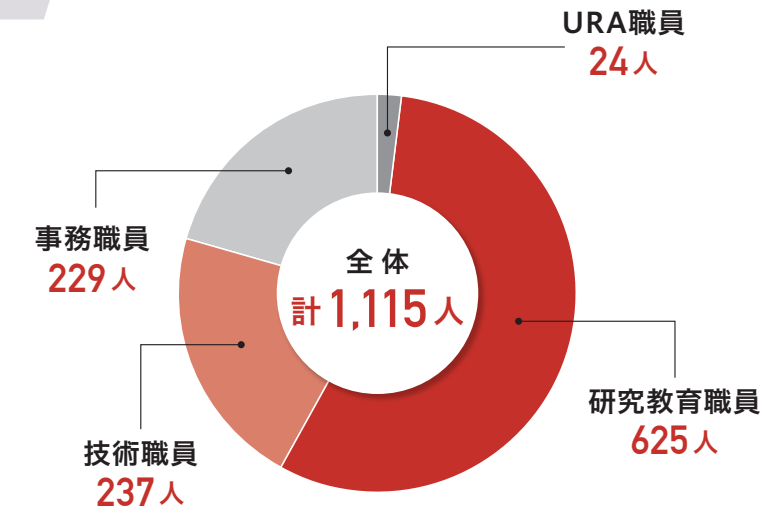
自然科学研究機構

各種データ

Data

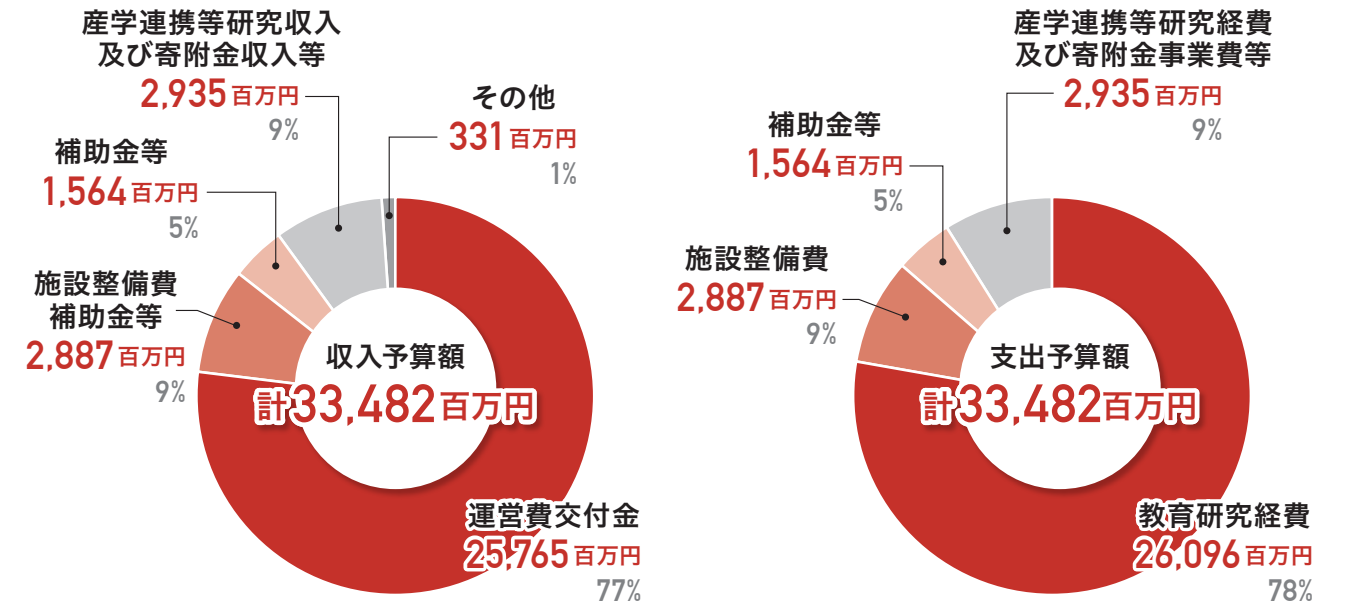
職員数

2023年4月1日現在



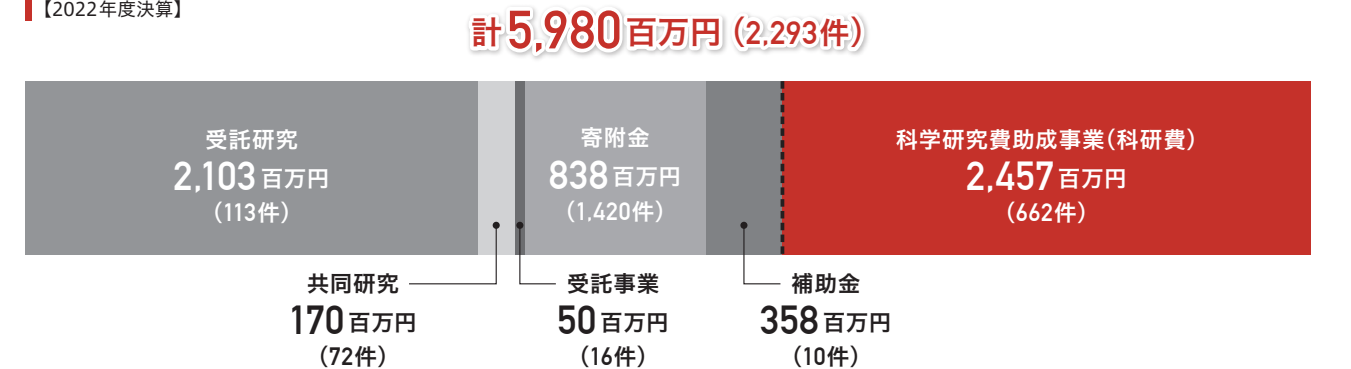
収入と支出(予算)

[2023年度予算]

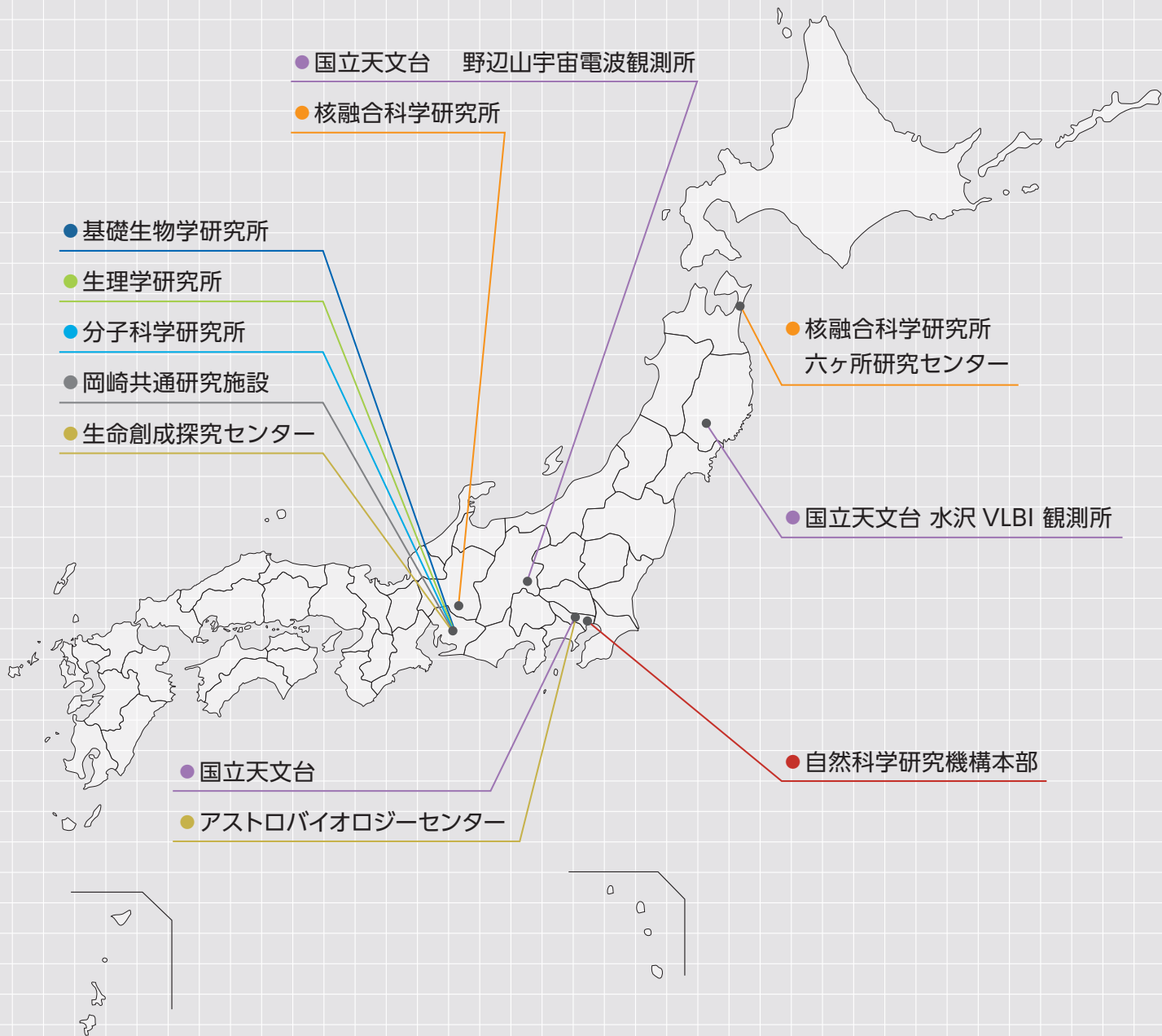


外部資金等の内訳

[2022年度決算]



※端数整理(百万円未満切り捨て)のため、項目ごとの合計は総合計と一致しない場合があります。



ハワイ

国立天文台 ハワイ観測所

- すばる望遠鏡
- ヒロ・オフィス

チリ

国立天文台 チリ観測所

- アルマ望遠鏡 山頂施設
- サンティアゴ・オフィス

自然科学研究機構本部

National Institutes of Natural Sciences

〒105-0001
東京都港区虎ノ門4-3-13
ヒューリック神谷町ビル2F
TEL. 03-5425-1300(代表)
FAX. 03-5425-2049
URL. <https://www.nins.jp/>



基礎生物学研究所

National Institute for Basic Biology

〒444-8585
愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38
TEL. 0564-55-7652
FAX. 0564-53-7400
URL. <https://www.nibb.ac.jp/>



国立天文台

National Astronomical Observatory of Japan

〒181-8588
東京都三鷹市大沢2-21-1
TEL. 0422-34-3600(代表)
FAX. 0422-34-3690
URL. <https://www.nao.ac.jp/>



生理学研究所

National Institute for Physiological Sciences

〒444-8585
愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38
TEL. 0564-55-7700
FAX. 0564-52-7913
URL. <https://www.nips.ac.jp/>



核融合科学研究所

National Institute for Fusion Science

〒509-5292
岐阜県土岐市下石町322-6
TEL. 0572-58-2222(代表)
FAX. 0572-58-2601
URL. <https://www.nifs.ac.jp/>



分子科学研究所

Institute for Molecular Science

〒444-8585
愛知県岡崎市明大寺町字西郷中38
TEL. 0564-55-7418
FAX. 0564-54-2254
URL. <https://www.ims.ac.jp/>



アストロバイオロジーセンター

Astrobiology Center

〒181-8588
東京都三鷹市大沢2-21-1
TEL. 0422-34-4072
E-mail. abc-pub@abc-nins.jp
URL. <https://www.abc-nins.jp/>



生命創成探究センター

Exploratory Research Center on Life and Living Systems

〒444-8787
愛知県岡崎市明大寺町東山5-1
E-mail. info@excells.orion.ac.jp
URL. <https://www.excells.orion.ac.jp/>



ご寄附のお願い

Request for donation

自然科学研究機構では、研究活動の飛躍的向上とともに、若手人材育成のためにご寄附を募っております。どうぞ格別の御支援を賜りますようお願い申し上げます。ご寄附に関する詳細な内容につきましては、右のQRコードよりご覧いただけますようお願い申し上げます。

自然科学研究機構 寄附

https://www.nins.jp/about/folder11/post_26.html

